

## 沖縄県名護市屋部の手踊りエイサー(2)

小林 公 江

(教育学科教授)

小林 幸 男

(京都教育大学名誉教授)

### はじめに

本報告は前号の「名護市屋部の手踊りエイサー(1)」に続くものである。(1)では屋部の伝承曲30曲の楽譜資料を作成したので、本稿では歌詞資料の作成を試みた。

屋部では現在も、1987年に青年会が作成した歌詞集を基にエイサーを行っている。この歌詞集は過去の複数のテキストや実際の演奏を基に、『琉歌全集』<sup>1</sup>や『聲楽譜附野村流工四』<sup>2</sup>等の古典音楽に関する出版物を参考にしながら1節毎に検討を加えて作成したという画期的な歌詞集で、本調子24曲と一二揚6曲の計30曲が掲載されている。歌詞は漢字交じりの平仮名表記、囃しは片仮名表記を基本としており、漢字には文語体の歴史的な仮名遣いで片仮名のふりがなが付されている。また三線弾きと踊り手衆の歌い分けは、踊り手衆の部分に(囃)と記すことによって明示されている。さらに、例えばハベルとハビル(=蝶)のように異なる発音や囃しの違いなども記載されているので資料としても貴重なものとなっている。しかし、歌詞の意味に関しては、適宜、単語の意味が記されているものの共通語訳はついていない。

このため、本報告では、2008年に行ったエイサーに関する聞き取りや歌と踊りの記録<sup>3</sup>を中心に、上記歌詞集も参考にしながら、歌詞を漢字交じりの平仮名表記、囃しを漢字交じりの片仮名表記でまとめ、共通語訳を試みた。

故老によれば、屋部のエイサーは「80節あった」という。この「節」は歌ではなくおそらく歌詞を示す言葉であろう。屋部では1曲につき2節(2番分)の歌詞を歌うのが一般的であっ

たことから、曲数は40曲ほどであったと考えられる。しかし現行曲は30曲で53節、同系旋律を反復するものを2節と数えても60節しかないもので、失われた曲がかなりあることがわかる。

実際、故老からの聞き取りで《伊舎堂前》<sup>イチロウ</sup>《一路ヘイヨー》<sup>イチロウ</sup>《ジントーヨー節》<sup>カネ</sup>《加那ヨー》<sup>カネ</sup>《浜千鳥》<sup>ちじゅやー</sup>《谷茶前》<sup>たんちやめー</sup>《カマヤシノー》<sup>か</sup>《東前門》<sup>あがりめーじー</sup>《だんじゅ嘉例吉》<sup>あがりめーじー</sup>《ましゅんく節》<sup>あがりめーじー</sup>をかつて踊っていたことが確認できたが、どのような歌詞であったか、いつこれらが途絶したかについては、まだ十分な調査ができていない。このため本稿では途絶した曲については《ましゅんく節》しか取り上げることができなかったが、今後は更に調査を重ね、できる限り明らかにしていきたいと考えている。

### 謝辞

エイサーや行事について多くのことをお教え下さいました屋部の壮年・古老の皆様、青年会の皆様に心より御礼申し上げます。

### 註

1. 島袋盛敏・翁長俊郎『標音評訳 琉歌全集』武蔵野書院、1968年
2. 伊差川世瑞・世礼国男『聲楽譜附野村流工四』全4巻 野村流音楽協会、1935-41年初版
3. この記録は小林公江が研究分担者として科学研究費補助(20520128)を受けて行った。

### 文献

名護市屋部青年会作成の歌詞資料(1987)  
清水彰編著 1994『琉歌大成』沖縄タイムス社  
半田一郎編著 1999『琉球語辞典』大学書林

# 凡例

- ・歌詞本体は、一部外来語を除き漢字平仮名交じり表記を基本とした。  
 囃し詞は漢字片仮名交じり表記を基本としたが、歌詞本体の一部を含む場合にはその部分のみを漢字平仮名交じりで表記した。掛声は片仮名表記した。
- ・音声上殆ど区別のない音(「り」と「でい」等)は、対応する琉球方言や日本語に従って書き分けた。
- ・〈 〉 …… 踊り手の歌唱部分を示す。 [ ] …… 歌詞や囃し詞のヴァリエーションを示す。  
 { } …… 歌詞の音数を整えるための産み字を示す。
- ・明朝体で共通語訳を付けた。訳は直訳に近い形で小林幸男が行い、小林公江が校閲した。
- ・歌詞の注釈を、共通語訳の後の…で適宜記した。

## 本調子

### 01. 《打ち囃す鼓》

スリスリ目出度イ〈嘉例吉 目出度イ〉 スリスリ目出度イ〈嘉例吉 目出度イ〉  
 サーサーサーサ〈嘉例吉 嘉例吉〉  
 サー 打ち囃す鼓 打ち音ぬ中に 〈ハラ ユーヒガネー〉 世果報年続くサ 御願えさびら  
 〈ハイヤ センヨー シトゥリトウナ[ウチウチュナ] 嘉例吉 嘉例吉〉  
 サー豊かなる御代ぬ 徴 顕りてい 〈ハラ ユーヒガネー〉 雨露ぬ恵みサ 時ん違ん  
 〈ハイヤ センヨー シトゥリトウナ[ウチウチュナ] 嘉例吉 嘉例吉〉

ソレソレ目出度イ〈嘉例吉(=縁起の良いこと)目出度イ〉 サーサーサーサ〈嘉例吉 嘉例吉〉  
 サー 打ち囃す太鼓。打ち音の中に(囃し)豊かなる年が続くお願いをしましょう。(囃し)  
 サー 豊かなる御代の徴が顕れて(囃し)、雨露の恵みは時節を違えない。(囃し)

### 02. 《久高万寿主》

スリサースリ 〈エイスリサーサー スリ ハイ〉  
 久高万寿主や 〈サーサー スリ ハイ〉 清らゆーべーかめーてい[とうめーてい]来ゆんどー  
 〈ヨー 玉黄金 スリサーサー エイスリサーサー スリ ハイ〉  
 吾達が 若さる間あ 〈サーサー スリ ハイ〉 首里那覇ん 二月三月  
 〈ヨー 玉黄金 今宵又話又面白サ[面白サ] スリサーサー エイスリサーサー スリ ハイ〉  
 衣着しれー 大綾衣着ち 〈サーサー スリ ハイ〉 さばふませー 長刀さばくでい  
 〈ヨー 存分腐ラ 今宵又話又面白サ[面白サ] スリサーサー エイスリサーサー スリ ハイ〉  
 物しみれー なんちち焦がらち 〈サーサー スリ ハイ〉 味しみれー 七回ん味しち  
 〈ヨー 存分腐ラ 今宵又話又面白サ[面白サ] スリサーサー エイスリサーサー スリ ハイ〉

久高万寿主は〈サーサー、ソレ、ハイ〉綺麗な 妾を探し求めて(求めて)行くよ、〈ヨー大切な人(よ)〉  
 〈ヨー大切な人(よ)。今宵ノ話ガ面白イ。ソレサーサー、エイソレサーサー、ソレ、ハイ〉  
 わしらが若い間は首里や那覇も二ヶ月三ヶ月、〈ヨー大切な人(よ)。(以下同前)〉  
 着物を着させりや大柄の着物を着て、草履を履かせりや長刀のような草履を履いて、  
 〈ヨー能なし(だね)。今宵ノ話ガ面白イ。ソレサーサー、エイソレサーサー、ソレ、ハイ〉  
 料理をさせりやお焦げを焦がして、味見をさせりや七回も味見をして、〈ヨー能なし(だね)。(同前)〉

### 03. 《ドンドン節》

……一般には《作たる米》として知られる曲

手<sup>テ</sup>ユルシ<sup>ワ</sup>ハドンドン<sup>ア</sup> 〈赤<sup>アカ</sup>イ<sup>ア</sup>[明<sup>クミ</sup>カイ]米<sup>メ</sup>ナンダイ スリ ハイ〉  
 今年<sup>くとし</sup>作<sup>し</sup>たる<sup>め</sup>米<sup>まい</sup>や 〈数<sup>し</sup>珠<sup>し</sup>玉<sup>だ</sup> 蔦<sup>まい</sup>ぬ如<sup>ぐ</sup> エイスリサーサー スリサーサー スリ ハイ〉  
 北風<sup>にしかぜ</sup>ぬ吹<sup>ふ</sup>かば 〈真<sup>ま</sup>南<sup>みな</sup>ぬ畦<sup>あぜ</sup> [畦<sup>あぜ</sup>]枕<sup>まくら</sup> エイスリサーサー スリサーサー スリ ハイ〉

手ヲオロセバドンドン、〈(意不詳) ソレ、ハイ〉

今年作った米は 〈(大きく稔って)数珠玉の蔦のよう。エイソレサーサー、ソレサーサー、ソレ、ハイ〉

北風が吹いたなら 〈真南の畦を枕に。(＝たわわに稔った稲穂が、南側の畦にもたれ下がって。))

### 04. 《テンヨー節》

テンヨーテンヨー シトウリトウテン ササ 〈ハール[ラ]ヨー ハラ ユーヒガネー イヤササ〉  
 庭<sup>に</sup>ぬ蜘蛛<sup>くばし</sup>が巣<sup>し</sup>にサヨ 下<sup>さ</sup>がてい知<sup>し</sup>り蝶<sup>はべる</sup>  
 〈テンヨーテンヨー シトウリトウテン ササ ハール[ラ]ヨー ハラ ユーヒガネー イヤササ〉  
 二股<sup>ふたまた</sup>掛<sup>が</sup>き里<sup>さと</sup>にサヨ 打<sup>う</sup>ち惚<sup>ふ</sup>りてい行<sup>い</sup>ちゆな 〈同前〉

庭の蜘蛛の巣にサヨ 捕まって知れ、蝶よ。／二股を掛けた彼にサヨ うち惚れて行くな。

〈テンヨーテンヨー シトリトテン(……三味線の擬音) ササ、～(以下も囃し)～

### 05. 《エイサー節》

エイサーエイサー 〈七月<sup>ヒチグツチ</sup>[ヒヤルガ]エイサー スリサーサー イヤササ〉  
 七月<sup>ひちぐわち</sup>七夕<sup>なん</sup> 七日<sup>か</sup>ぬ十日<sup>とお</sup> 〈エイサーエイサー 七月<sup>ヒチグツチ</sup>エイサー スリサーサー イヤササ〉  
 七月<sup>ひちぐわち</sup>ぬ盆<sup>ぶん</sup>に 山原<sup>やんばる</sup>に下<sup>う</sup>りてい 〈エイサーエイサー 七月<sup>ヒチグツチ</sup>エイサー スリサーサー イヤササ〉

七月七夕 七日の十日 〈エイサーエイサー、盆ノエイサー、ソレサーサー、イヤササ〉

七月の盆に(那覇から田舎の)山原に下って、〈(同前)〉

### 06. 《稲摺り節》

稲<sup>イニ</sup>摺<sup>シ</sup>り稲<sup>シ</sup> 粟<sup>アワ</sup>選<sup>ユ</sup>り選<sup>ユ</sup>り 〈粟<sup>アワ</sup>ヌン選<sup>ユ</sup>ラリミ 米<sup>クミ</sup>ヌドウ選<sup>ユ</sup>ラリル スーリサーサー イヤササ〉  
 南<sup>なん</sup>鐙<sup>ぢやう</sup>白<sup>はく</sup>ない 黄<sup>く</sup>金<sup>が</sup>軸<sup>じく</sup>立<sup>た</sup>ててい  
 〈稲<sup>イニ</sup>摺<sup>シ</sup>り 粟<sup>アワ</sup>選<sup>ユ</sup>り選<sup>ユ</sup>り 粟<sup>アワ</sup>ヌン選<sup>ユ</sup>ラリミ 米<sup>クミ</sup>ヌドウ選<sup>ユ</sup>ラリル スーリサーサー イヤササ〉  
 量<sup>はか</sup>てい盛<sup>む</sup>てい余<sup>あま</sup>す 雪<sup>ゆち</sup>ぬ[雪<sup>ゆち</sup>ぬ]真<sup>ま</sup>米<sup>ぐみ</sup>  
 〈ウネマタ ウネササ アネマタ ウリササ[アネササ] スーリサーサー イヤササ〉

銀の(挽き)臼に黄金の軸を立てて、

〈稲ヲ摺レ摺レ、粟ヲ選レ選レ。粟ガ選レヨウカ、米コソ選レル。ソーレサーサー、イヤササ〉

量って盛って余らず(ほどの)雪の(ような)白米。〈ソレマタ ソレササ、ヤレマタ ソレササ[ヤレササ]〉

### 07. 《越來節》

ユヤサ せる事<sup>こと</sup>や 〈イサ添<sup>ソ</sup>イ添<sup>ソ</sup>イ添<sup>ソ</sup>イ〉 ユヤサ せる事<sup>こと</sup>や 〈イサ添<sup>ソ</sup>イ添<sup>ソ</sup>イ添<sup>ソ</sup>イ〉  
 越<sup>ぐい</sup>来<sup>く</sup>や間<sup>ま</sup>切<sup>ぢり</sup>に あたる事<sup>こと</sup> 文<sup>てい</sup>子<sup>いく</sup>富<sup>ふ</sup>里<sup>さと</sup>が せる事<sup>こと</sup>や  
 〈ユヤサ せる事<sup>こと</sup>や イサ添<sup>ソ</sup>イ添<sup>ソ</sup>イ添<sup>ソ</sup>イ チェ<sup>セー</sup>チェ<sup>く</sup>エ[イヤササ]〉  
 夜<sup>ゆ</sup>なびやがま家<sup>や</sup> 跳<sup>と</sup>ん巡<sup>めぐ</sup>てい 女<sup>み</sup>童<sup>やう</sup>三<sup>さん</sup>人<sup>にん</sup> 居<sup>う</sup>るうちに

〈ユヤサ 居るうちに イサ添イ添イ添イ チェチェ[イヤササ]〉

越来間切(現沖縄市南部、元コザ市)にあったこと。(番所)書記の富里が(確かに)した事には、

〈ヨヤサ した事には、サー緒ニ緒ニ(囃し)〉

夜なべの娘宿を飛び廻って、娘が三人いる処に、(そこから好きな娘を呼び出して、～)

……以下、恋人を誘い出して山内村で野遊びをする様へと展開する歌。

## 08. 《今帰仁ぬ城》

サー ヒヤルガヘイ 〈ササ ヒヤルガヘイ〉 サー ヒヤルガヘイ 〈ササ ヒヤルガヘイ〉

今帰仁ぬ城 霜成ぬ九年母 〈サー ヒヤルガヘイ ササ ヒヤルガヘイ〉

志慶真乙樽がヨンサー 貫ちやいマタ佩ちやい 〈サー ヒヤルガヘイ ササ ヒヤルガヘイ〉

今帰仁の城(=北山城)、遅成りの蜜柑。〈サー ヒヤルガヘイ、ササ ヒヤルガヘイ〉

志慶真村(現今帰仁村諸志の元ムラ)の乙樽(王の寵愛を受けた女の名)が首に掛けたり外したり。

……遅くできた王子を溺愛する様を譬えている。

## 09. 《目出度イ節》

スリスリ 目出度イ 〈嘉例吉 目出度イ〉 スリスリ 目出度イ 〈嘉例吉 目出度イ〉

屋部村や 細さしが 肝合わち揃てい 作るむ作いとう 〈サンサ 共に栄ら〉

〈目出度イ 目出度イ スリスリ 目出度イ 嘉例吉 目出度イ〉

今年む作いや あん清らさゆかてい 倉に積ん余ち 〈サンサ 真積しやびら〉

〈目出度イ 目出度イ スリスリ 目出度イ 嘉例吉 目出度イ〉

屋部のムラは小さいが、心を合わせて揃って作る農作物と〈サンサ 共に栄えよう。〉

今年の作物はあんなに美しく稔って。蔵に積み余らせ、真積み(稲藁に)しましょう。

〈目出度イ、目出度イ、ソレソレ目出度イ、嘉例吉(=縁起の良いこと)、目出度イ〉

## 10. 《鳩間節》

サーノユイサー 〈シタリガ ユイサー〉 サーノユ[エ]イサー 〈シタリガ ユ[エ]イサー〉

鳩間中杜 走い登てい 〈サーノ ユイサー〉 くばぬ下うてい 走い登てい

〈南ヤヨーティバ カイ岳 手取ユルデンヨー 勝ティ見事〉 サーノユイサー 〈シタリガ ユイサー〉

かいしやむいたる 杜ぬくば 〈サーノユイサー〉 清らささしたる 頂ぬくば

〈南ヤヨーティバ カイ岳 手取ユルデンヨー 勝ティ見事〉 サーノユイサー 〈シタリガ ユイサー〉

(八重山諸島)鳩間島の中丘に走り登る。〈サーノヨイサー〉クバ(=檳榔。椰子の一種)の下まで走り登る。

綺麗に繁った丘のクバ、〈サーノヨイサー〉美しく茂った頂のクバ。

〈南ハト見ヤルト(西表島ノ)古見岳ガ手ニ取ルヨウデ優レテ見事。〉サーノヨイサー〈シタリガヨイサー〉

## 11. 《伊計離節》

イサ 添イ添イ添イ 〈イサ 添イ添イ添イ〉 イサ 添イ添イ添イ 〈イサ 添イ添イ添イ〉

行けば伊計ヨー離 ヨーハリ 戻す浜平安座 〈ヘイヨー シュラーヨ〉

イサ 添イ添イ添イ 〈イサ 添イ添イ添イ〉

へんざみやーらびぬー 欲しや物や何やがや 〈へいー シューーヨ〉  
イサ 添イ添イ添イ 〈イサ 添イ添イ添イ〉

行けば離島の(現うるま市)伊計島、戻す浜比嘉島、平安座島。

「平安座の娘の欲しいものは何かな?」(「押竹と綜紉、敷板に巻板(……どれも機織りの部品)よ。」「～～)

〈へいー、可愛イ人ヨ、) サア、一緒ニ一緒ニ 〈サア、一緒ニ一緒ニ〉

12A. 《いちゅび小節(1) ガマク》 ……一般には《糸満人》として知られる曲

カミティ ガマク 〈イ チュイチュイチュイ〉 カミティ ガマク 〈イ チュイチュイチュイ〉  
糸満人 糸満人ぬ嫁なりば いらぶち刺身ん 皆売りしゃびら  
〈いらぶち刺身ん カミティ ガマク イ チュイチュイチュイ〉

糸満の人、糸満の人(=漁師)の嫁になったので、いらぶち(武鯛の仲間)の刺身も完売しましょう。

〈いらぶちの刺身も 頭ニ載セテ、腰、イ チュイチュイチュイ〉

……本部町一円のこの囃し詞は「ガマク ガマク タミティタミティ(腰ヲ曲ゲテ、の意) イ チュイ〜」。

屋部では頭に載せて売るイメージからか、タミティがカミティ(頭ニ載セテ、の意)となっている。

12B. 《いちゅび小節(2)》

影小ぬあんでいち 自慢すみあば小 〈影小や 皮どうやっさい 気持第一どー〉  
〈吾達心ん ひらって知り 氷桔餅甘生姜 今来ヨイナー 〈ウネ 三世 イヤササ〉  
いちゅび小に惚りてい 山内原通てい 〈通てい珍しやや 喜納ぬ番所〉  
〈思ヤガ来ヨン来ヨン 愛シガ来ヨン 今来ヨイナー 〈ウネ 三世 イヤササ〉

容姿がいいと言って自慢するのか、姐さん。〈容姿は皮(=表面)に過ぎないよ、気持が第一だよ。〉

〈僕の心も付き合って知りなよ。氷砂糖・桔餅(柑橘系の餅菓子)・甘生姜)

モウ来テルカイ。〈ソレ 易者サン、イヤササ〉

苺ちゃんに惚れて、山内原に通って。〈通って珍しいのは、(現読谷村)喜納の役場。〉

〈恋人ガ来テル来テル、イトシイ人ガ来テル来テル。〉モウ来テルカイ。〈ソレ 易者サン、〜〉

13. 《名護ぬ浦節》

ユシヨーユシ むてえ栄い 〈ユシヨーユシ むてえ清らさ〉  
ユシヨーユシ むてえ栄い 〈ユシヨーユシ むてえ清らさ〉  
だんじゅ響まりる 名護ぬ番所 〈スリ 松とうがぢまるぬ むてえ栄い ユシヨーユシ むてえ清らさ〉  
浦々ぬ深さ 名護浦ぬ深さ 〈スリ 名護ぬ女童ぬ 思い深さ ユシヨーユシ 思い深さ〉

まこと名高き名護の役場、〈ソレ 松とガジュマルが繁り栄え、ヨシヨーヨシ、ますます美しい。〉

浦々が深い(のは)名護浦が深い。〈ソレ 名護の娘の思い(も)深い。ヨシヨーヨシ、思い(も)深い。〉

14. 《へいー スーラーヨー (四ツ竹)》

へいー シューラヨー 〈へいー シューラヨー〉 へいー シューラヨー 〈へいー シューラヨー〉  
打ち鳴らし鳴らしヨー 〈イヤサヌサ〉 四ツ竹ぬ音ぬ清らさヨー  
〈へいー シューラヨー へいー シューラヨー〉

ちゅー な た 今日や名に立ちゆるヨー〈イヤサヌウサー〉十五夜でむぬヨー  
 〈ヘイヨー シューラヨー ヘイヨー シューラヨー〉

打ち鳴らせならせヨ〈イヤサノサ〉、四ツ竹の音が綺麗だヨ。／今日は名高い十五夜だもの。  
 〈ヘイヨー 素敵ダヨ、ヘイヨー 素敵ダヨ〉

15. 《南嶽節》  
 ナンダキブシ ウムシリムン ナンダキブシ ウムシリムン イチドウ ウドウ ム セー ニドウ ウドウ ム テー  
 南嶽節ヤ 面白物〈南嶽節ヤ 面白物〉 一度ヤ踊ラバ 持タシミセミ 〈二度ヤ踊ラバ 持タステ〉  
 打ち鳴らし鳴らしヨー サーサー 四ツ竹は[や]鳴らちヨー サーサー  
 スラヨーイ〈スラヨーイ イ今日遊ブ 南嶽ヨー 南嶽節ヤ 面白物〉  
 鳴らす四ツ竹ぬヨー サーサー 音ぬ[清ら]清らさヨー サーサー  
 スラヨーイ〈スラヨーイ イ今日遊ブ 南嶽ヨー 南嶽節ヤ 面白物〉

南嶽節ハ面白イ物〈南嶽節ハ面白イ物〉、一度踊レバ持タセナサリョウカ、二度ハ踊レバ持タセルヨ。  
 打ち鳴らせならせ、四ツ竹を鳴らして、／鳴らす四ツ竹の音が美しい。  
 スラヨーイ〈スラヨーイ、今日踊ル南嶽ヨ。南嶽節ハ面白イ物〉

16. 《若夏の訪れ》 ……共通語歌詞

サー イヤサノサー〈サー イヤサノサー〉 サー イヤサノサー〈サー イヤサノサー〉  
 若夏の訪れ〈サー イヤサノサー サー イヤサノサー〉  
 映え薫る稲田ヨ〈サー イヤサノサー サー イヤサノサー〉  
 豊かなる 黄金の波踊るよ 〈踊レヤ踊レ サア踊レ 踊レヤ踊レ サア踊レ〉  
 紅型の衣よ〈サー イヤサノサー サー イヤサノサー〉 花染めの袂ヨ〈同前〉  
 早乙女の 踊る姿美し 〈踊レヤ踊レ 早乙女 踊レヤ踊レ 早乙女〉  
 島の月明るく〈サー イヤサノサー サー イヤサノサー〉 浜下りて踊ろうヨ〈同前〉  
 夜更け知らず 舞い狂う島人 〈踊レヤ踊レ 島人 踊レヤ踊レ 島人〉

17. 《ゼイサー節（砂持節）》  
 ゼイサゼイサゼイサー〈ゼイサゼイサゼイサー〉 ゼイサゼイサゼイサー〈ゼイサゼイサゼイサー〉  
 阿良ぬ浜砂や 持ていば禁止らりてい 〈ゼイサ ゼイサ ゼイサー〉  
 頼でい西泊 ハイヨー〈持たち 給り ゼイサ ゼイサ ゼイサー〉  
 原やはんた原 道や小坂道 〈同前〉 思ゆらば里前〈とうめてい[忍でい]いもり 〈以下同前〉

ゼイサー ゼイサー ゼイサー(運搬の掛け声という。) ……農地改良のための砂運びの様を表す。  
 (伊江島の)阿良(集落)の浜砂は採ることが禁止されて。どうか西泊(の役人様)、〈採らせて下さい。〉  
 畑は陰しい畑、道は坂道。(私を)思うなら貴方、〈尋ねて[忍んで]いらして下さい。〉

18. 《スライサ（スーリ東）》  
 スライサ〈ハイヤ 島カイ行チュシガ 遣ラスミ如何スガ  
 〈行チュウトウウ遣ラスル 遣ラチョティ悔ヤムナ ケスンキャ スンキャ スンキャ〉  
 スーリ東スーリヌ打ち向かてい〈スリスーリヌ 綾蝶 スーリサーサー スライサ ハイヤ〉

しば ま はべる いやい い やい たぬ  
暫し待てい 蝶 言遣 〈スリスーリヌ [言遣]頼ま スーリサーサー スライサ ハイヤ〉

ムラへ行ケド、行カソウカドウスルカ。

〈行クトコソ行カセル。行カセトイテ悔ヤムナ。引ッパツチャエ、引ッパツチャエ〉

ソーレ 東に向かつて〈ソレソーレノ(飛ぶ)美しい蝶。ソーレサーサー、スライサ、ハイヤ〉

暫し待て、蝶よ。(愛する人に)言付けを〈ソレソーレノ 言付けを頼もう。(同前)〉

## 19. 《イマーデイスナー<sup>ぶし</sup>》

イマーデイスナー 〈チ ヤリヤリヤリ〉 イマーデイスナー 〈チ ヤリヤリヤリ〉  
なま降ゆる雨や 世果報雨やしが 〈吾が生まれ島ん 降いがしゃびら〉

〈イマーデイスナー チ ヤリヤリヤリ〉  
んぞが面影に ひかさりてい我身や 〈笠に顔隠ち しぬでい行ちゅん〉

〈イマーデイスナー チ ヤリヤリヤリ〉

今降っている雨は豊作の雨(豊作を招く雨)だけれど、〈私のふるさとも降っているのでしょうか。〉

彼女の姿に心引かされて、私は〈笠に顔を隠して忍んで行く。〉

〈イマーデイスナー(意不詳) 行カセチャエ、行カセチャエ〉

## 20. 《海<sup>うみ</sup>やから<sup>ぶし</sup>一節》

海<sup>ウミ</sup>ヤカラー ドンドン 〈スーリ エイスーリ ササ エイスーリ〉  
海<sup>うみ</sup>やからーに惚<sup>ふ</sup>りてい 夜<sup>ゆー</sup>ぬ明<sup>あ</sup>きし知<sup>し</sup>らん 如<sup>い</sup>何<sup>ちや</sup>し親<sup>うやちよー</sup>兄<sup>ひんとー</sup>弟に 返<sup>ひんとー</sup>答<sup>ひんとー</sup>しゆゆが[しゆが]

〈海<sup>ウミ</sup>ヤカラー ドンドン スーリ エイスーリ ササ エイスーリ〉  
親<sup>うや</sup>ぬ持<sup>うと</sup>たち<sup>うと</sup>る夫<sup>りつ</sup>や 立<sup>ち</sup>派<sup>うと</sup>な清<sup>ちや</sup>ら夫<sup>うと</sup>やしが どうーくる持<sup>む</sup>つち<sup>うと</sup>ゆる夫<sup>うと</sup>や 腐<sup>くさ</sup>り鍋<sup>な</sup>な鉢<sup>く</sup>  
〈海<sup>ウミ</sup>ヤカラー ドンドン スーリ エイスーリ ササ エイスーリ〉

船乗りに惚れて夜が明けるのも分からない。どうやって親兄弟に言い訳をしようか。

親が結婚させた夫は立派な美男の夫だけれど、私自身で選んだ夫は腐れ<sup>い</sup>鑄<sup>か</sup>掛<sup>か</sup>け屋。

〈船乗り、ロンドン、ソーレ エイソーレ、ササ エイソーレ〉

## 21. 《雨<sup>あみ</sup>降<sup>ふ</sup>らすなよ<sup>むらぶし</sup> (三村節)》

雨<sup>あみ</sup>降<sup>ふ</sup>らすなよ<sup>むらぶし</sup> 元<sup>むとうかんじ</sup>被<sup>むら</sup>ゆんどー 〈サー 嘉<sup>カリ</sup>例<sup>リ</sup>吉<sup>ユシ</sup> 嘉<sup>カリ</sup>例<sup>リ</sup>吉<sup>ユシ</sup>〉  
雨<sup>あみ</sup>降<sup>ふ</sup>らすなよ<sup>むらぶし</sup> 元<sup>むとうかんじ</sup>被<sup>むら</sup>ゆんどー 〈サー 嘉<sup>カリ</sup>例<sup>リ</sup>吉<sup>ユシ</sup> 嘉<sup>カリ</sup>例<sup>リ</sup>吉<sup>ユシ</sup> チェ<sup>カ</sup>エ<sup>リ</sup>エ<sup>ユシ</sup>[イヤササ]〉  
小<sup>う</sup>禄<sup>る</sup>豊<sup>く</sup>見<sup>み</sup>城<sup>く</sup> 垣<sup>み</sup>花<sup>むら</sup>三<sup>み</sup>村<sup>むら</sup> 三<sup>あんぐわー</sup>村<sup>たー</sup>ぬ姐<sup>すりとー</sup>小<sup>ぬめう</sup>達<sup>ばなし</sup>が揃<sup>すりとー</sup>とてい 布<sup>ぬめう</sup>織<sup>ばなし</sup>い話<sup>すりとー</sup>  
〈綾<sup>あや</sup>まみぐなよ<sup>むらぶし</sup> 元<sup>むとうかんじ</sup>被<sup>むら</sup>ゆんどー サー 嘉<sup>カリ</sup>例<sup>リ</sup>吉<sup>ユシ</sup> 嘉<sup>カリ</sup>例<sup>リ</sup>吉<sup>ユシ</sup>〉  
上<sup>うい</sup>泊<sup>どうまい</sup>泊<sup>とうまい</sup> 元<sup>み</sup>泊<sup>むら</sup>と三<sup>にーせー</sup>村<sup>たー</sup> 三<sup>すりとー</sup>村<sup>すりとー</sup>ぬ二<sup>ます</sup>才<sup>た</sup>達<sup>ばなし</sup>が揃<sup>すりとー</sup>とてい 真<sup>ま</sup>塩<sup>す</sup>焚<sup>た</sup>ち話<sup>ばなし</sup>  
〈雨<sup>あみ</sup>降<sup>ふ</sup>らすなよ<sup>むらぶし</sup> 元<sup>むとうかんじ</sup>被<sup>むら</sup>ゆんどー サー 嘉<sup>カリ</sup>例<sup>リ</sup>吉<sup>ユシ</sup> 嘉<sup>カリ</sup>例<sup>リ</sup>吉<sup>ユシ</sup>〉

(現那覇市)小禄、(豊見城市)豊見城、(那覇市)垣花の三村。三村の姐さんが揃っていて布織り話。

〈「綾糸ヲ間違エルナヨ、元手ヲ失ウヨ。」サー 嘉例吉 嘉例吉〉

(現那覇市)上泊、泊、元泊と三村。三村の青年が揃っていて塩焚き話。

〈「雨ヲ降ラセルナヨ。元手ヲ失ウゾ。」サー 嘉例吉 嘉例吉〉

## 22. 《ピーラルラー (ニ合節)》

ピーラルラー ラーラルラーラー  
 〈ニ合<sup>ニンゴ</sup>ドーヤー<sup>ぶし</sup>ニ合<sup>ニンゴ</sup> ナー<sup>ニ</sup>升<sup>イッシュニンゴ</sup>ニ合<sup>イッシュニンゴ</sup>〔一升<sup>ニ</sup>ニ合<sup>ニ</sup>〕 ニ合<sup>ニンゴ</sup>ドーヤー<sup>アツ</sup> 熱<sup>アツ</sup>ドーヤー シシ<sup>アツ</sup>[イヤササ]〉  
 一合<sup>いちごーわー</sup>小<sup>にんごーわー</sup>うた<sup>にんごーわー</sup>びみせーら ニ合<sup>にんごーわー</sup>小<sup>にんごーわー</sup>うた<sup>にんごーわー</sup>びみせーらば 〈か<sup>み</sup>みてい<sup>み</sup>巡<sup>み</sup>や<sup>み</sup>びら〉  
 〈サブエン サブエン サーサブエン ピーラルラー ラーラルラーラー〉  
 〈ニ合<sup>ニンゴ</sup>ドーヤー<sup>ニ</sup>ニ合<sup>ニ</sup> ナー<sup>ニ</sup>升<sup>イッシュニンゴ</sup>ニ合<sup>イッシュニンゴ</sup>〔一升<sup>ニ</sup>ニ合<sup>ニ</sup>〕 ニ合<sup>ニンゴ</sup>ドーヤー<sup>アツ</sup> 熱<sup>アツ</sup>ドーヤー シシ<sup>アツ</sup>[イヤササ]〉  
 此<sup>く</sup>ま<sup>め</sup>ぬ<sup>め</sup>は<sup>め</sup>ん<sup>め</sup>し<sup>め</sup>前<sup>め</sup>や 御<sup>う</sup>肝<sup>ち</sup>良<sup>ち</sup>た<sup>ち</sup>し<sup>ち</sup>や<sup>ち</sup>ぬ あ<sup>や</sup>ぐ<sup>う</sup>う<sup>う</sup>た<sup>う</sup>び<sup>う</sup>み<sup>う</sup>せ<sup>う</sup>ら<sup>う</sup>ば 〈か<sup>み</sup>みてい<sup>み</sup>巡<sup>み</sup>や<sup>み</sup>びら〉 〈以下同前〉

一合下さいませ、ニ合下さいましたら、〈(有り難く)頂戴して廻りましょう。〉

ここのお婆様はお心が宜しい。歌(?)を下下さいましたら(酒を)のせ、頂戴して廻りましょう。

〈サブエンサブエン サーサブエン ピーラルラー ラーラルラーラー(哨唢の擬音)〉

〈ニ合ダヨネ、ニ合。更ニ一升ニ合。ニ合ダヨネ、熱イネエ(=強イ酒ダネエ)、シーシ〉

## 23. 《ハイニ才達節》

ハイニ才<sup>ニ</sup>達<sup>セーター</sup> ナマドゥモーチャンナー 〈今日<sup>チュ</sup>夜<sup>ユ</sup>長<sup>ナガ</sup>トウ 遊<sup>アシ</sup>ビ<sup>ディ</sup>出来<sup>キ</sup>ラ<sup>キ</sup>サ<sup>キ</sup>ヤー〉  
 ハイアバ<sup>グー</sup>小<sup>グー</sup> ナマドゥモーチャンナー 〈今日<sup>チュ</sup>夜<sup>ユ</sup>長<sup>ナガ</sup>トウ 遊<sup>アシ</sup>ビ<sup>ディ</sup>出来<sup>キ</sup>ラ<sup>キ</sup>サ<sup>キ</sup>ヤー〉  
 今日<sup>ちゆー</sup>や<sup>な</sup>名<sup>な</sup>に<sup>た</sup>立<sup>た</sup>ち<sup>た</sup>ゆる 七<sup>ひち</sup>月<sup>ぐわち</sup>ぬ<sup>あし</sup>遊<sup>う</sup>び<sup>ち</sup> で<sup>う</sup>い<sup>う</sup>ち<sup>う</sup>や<sup>う</sup>よ<sup>う</sup>押<sup>う</sup>し<sup>う</sup>連<sup>う</sup>り<sup>う</sup>て<sup>う</sup>い<sup>う</sup> 踊<sup>う</sup>て<sup>う</sup>い<sup>う</sup>遊<sup>う</sup>ば<sup>う</sup>ヨ<sup>う</sup>ー<sup>あし</sup> ン<sup>う</sup>ゾ<sup>う</sup>ヨ<sup>う</sup>ー<sup>あし</sup>  
 〈ハイニ才<sup>ニ</sup>達<sup>セーター</sup> ナマドゥモーチャンナー 今日<sup>チュ</sup>夜<sup>ユ</sup>長<sup>ナガ</sup>トウ 遊<sup>アシ</sup>ビ<sup>ディ</sup>出来<sup>キ</sup>ラ<sup>キ</sup>サ<sup>キ</sup>ヤー〉  
 ん<sup>わー</sup>ぞ<sup>な</sup>と<sup>な</sup>う<sup>な</sup>吾<sup>な</sup>が<sup>な</sup>仲<sup>な</sup>や 松<sup>ま</sup>ぬ<sup>な</sup>葉<sup>な</sup>ぬ<sup>な</sup>如<sup>な</sup>に 落<sup>う</sup>て<sup>う</sup>い<sup>う</sup>て<sup>う</sup>い<sup>う</sup>枯<sup>か</sup>り<sup>か</sup>や<sup>か</sup>す<sup>か</sup>て<sup>か</sup>い<sup>か</sup>ん<sup>か</sup> 二<sup>た</sup>人<sup>た</sup>や<sup>た</sup>一<sup>ち</sup>道<sup>ち</sup>ヨ<sup>ち</sup>ー<sup>ち</sup> ン<sup>ち</sup>ゾ<sup>ち</sup>ヨ<sup>ち</sup>ー<sup>ち</sup>  
 〈ハイニ才<sup>ニ</sup>達<sup>セーター</sup> ナマドゥモーチャンナー 今日<sup>チュ</sup>夜<sup>ユ</sup>長<sup>ナガ</sup>トウ 遊<sup>アシ</sup>ビ<sup>ディ</sup>出来<sup>キ</sup>ラ<sup>キ</sup>サ<sup>キ</sup>ヤー〉

ヤア若者達、タッタ今来ラレタカ。〈今日ハ夜通シデ歌イ踊リ明カセルネエ。〉

ヤア姐サン、タッタ今来ラレタカ。〈今日ハ夜通シデ歌イ踊リ明カセルネエ。〉

今日は名高い盆の遊び(=歌舞)。さあ連れだって踊って楽しもう。

彼女と僕の中は松の葉のように、落ちて枯れるとも二人はひとつ道。 ……松葉はいつ迄も一對のまま

## 一ニ揚

## 24. 《ダンコ節》

チ<sup>チ</sup> ダンコ<sup>ター</sup> ヨー<sup>イナ</sup> ダンコ<sup>グ</sup> 〈スー<sup>イナ</sup>リ<sup>グ</sup> エイ<sup>ウ</sup>スリ<sup>チン</sup>〉  
 イッ<sup>イナ</sup>達<sup>グ</sup>アン<sup>イナ</sup>マー<sup>グ</sup> 女<sup>ウ</sup>子<sup>チン</sup>イ<sup>ノ</sup> 〈女<sup>ノ</sup>子<sup>キ</sup>ヤク<sup>キ</sup>トウ<sup>キ</sup>ドウ<sup>キ</sup> 績<sup>ウ</sup>ン<sup>キ</sup>ダイ<sup>キ</sup>紡<sup>キ</sup>チャ<sup>キ</sup>イ<sup>キ</sup> 縫<sup>キ</sup>ウ<sup>キ</sup>タイ<sup>キ</sup>着<sup>キ</sup>シ<sup>キ</sup>タイ<sup>キ</sup>〉  
 だん<sup>もーい</sup>こ<sup>なら</sup>舞<sup>な</sup>習<sup>な</sup>ゆ<sup>な</sup>ん<sup>な</sup>で<sup>な</sup>い 名<sup>な</sup>護<sup>な</sup>東<sup>な</sup>江<sup>な</sup>通<sup>な</sup>て<sup>な</sup>い<sup>な</sup>ヨ<sup>な</sup>ー<sup>な</sup>ヤ 番<sup>な</sup>所<sup>な</sup>石<sup>な</sup>垣<sup>な</sup>に ち<sup>し</sup>ん<sup>し</sup>し<sup>し</sup>切<sup>し</sup>り<sup>し</sup>割<sup>し</sup>て<sup>し</sup>い  
 〈チ<sup>チ</sup> ダンコ<sup>ター</sup> ヨー<sup>イナ</sup> ダンコ<sup>グ</sup> スー<sup>イナ</sup>リ<sup>グ</sup> エイ<sup>ウ</sup>スリ<sup>チン</sup>〉  
 だん<sup>もーい</sup>こ<sup>なら</sup>舞<sup>な</sup>一<sup>な</sup>番<sup>な</sup>や み<sup>な</sup>じ<sup>な</sup>や<sup>な</sup>井<sup>な</sup>原<sup>な</sup>通<sup>な</sup>て<sup>な</sup>い<sup>な</sup>ヨ<sup>な</sup>ー<sup>な</sup>ヤ 間<sup>ま</sup>切<sup>ま</sup>腐<sup>ま</sup>ら<sup>ま</sup>す<sup>ま</sup> 宇<sup>う</sup>茂<sup>う</sup>佐<sup>う</sup>だん<sup>う</sup>こ<sup>う</sup>  
 〈チ<sup>チ</sup> ダンコ<sup>ター</sup> ヨー<sup>イナ</sup> ダンコ<sup>グ</sup> スー<sup>イナ</sup>リ<sup>グ</sup> エイ<sup>ウ</sup>スリ<sup>チン</sup>〉

「君ノ母サン、女カイ。」「女ダカラコソ、糸ニ撚ッタリ紡イダリ縫ッタリ着セタリ(デキルノサ)。」

だんこ舞を習おうと名護の東江(集落名)に通ってヨーヤ 役所の石垣に膝を切り割って。〈(囃し)〉

だんこ舞の一番は、みじや井原を通してヨーヤ 村を腐らせる宇茂佐(集落名)だんこ。〈(囃し)〉

## 25. 《仲座兄》

如何<sup>ナカザアヒ</sup>ガ<sup>チヤ</sup>仲<sup>ナカザアヒ</sup>座<sup>チヤ</sup>兄<sup>ナカザアヒ</sup> 〈ユシ<sup>チヤ</sup>ヨ<sup>チヤ</sup>ー<sup>チヤ</sup> ユシ<sup>チヤ</sup>〉 如何<sup>ナカザアヒ</sup>ガ<sup>チヤ</sup> 仲<sup>ナカザアヒ</sup>座<sup>チヤ</sup>兄<sup>ナカザアヒ</sup> 〈ユシ<sup>チヤ</sup>ヨ<sup>チヤ</sup>ー<sup>チヤ</sup> ユシ<sup>チヤ</sup>〉



仲座兄や ぴーじゃー生わーさー 女子ん小や かみていうり売いが  
 〈売ららんたんどー あんまー 煎じてい汁飲ま いやーや女子ん小ぬ 餓鬼強さぬ〉  
 仲座兄が 一人女子ん小 辻中道 袴跳ん逃ち 〈如何ガ仲座兄 サラ迷惑〉  
 (かんぴちやーちやー ぴーじゃー生わーさー 刀自ぬ鶴小や かみていうり売いが  
 〈売ららんたんどー ちやーちやー 煎じてい汁飲ま いやーや女子ん小ぬ 餓鬼強さぬ〉)

ドウスル、仲座兄ィ。〈訳ヨー 訳〉／ 仲座兄いは山羊育てが仕事、娘は頭に載せてそれを売りに。

〈「売れなかったよ、母さん。煮込んで(山羊)汁(にして)飲もうよ。」

〈「お前は女のくせに食い意地が張ってるねえ。」

仲座兄いの唯一の娘は、辻(那覇の地名)の中道で(意不詳)。〈ドウスル、仲座兄ィ。「ジツニ迷惑」

(かんぴ(屋号か)お父は山羊を育てるのが仕事、奥さんのチルーは頭に担いでそれを売りに。

〈「売れなかったよ、お父。煮込んで(山羊)汁(にして)飲もうよ。」〜) ……門付けの家毎の即興例

## 26. 《六角堂》

ワネ カンドウナートウサヨー ンゾヨー 〈ワネ スンドウナートウサヨー ンゾヨー〉

ワネ スンドウナートウサヨー ンゾヨー 〈ワネ カンドウナートウサヨー ンゾヨー〉

六角堂ぬ裏にヨー 咲ちゆる牡丹花やヨー 〈花とう花とう咲きばヨー 御縁とう思ていヨー ンゾヨー〉

ワネ スンドウナートウサヨー ンゾヨー 〈ワネ カンドウナートウサヨー ンゾヨー〉

ゲンロー帽子や 若狭町 駒下駄小や 久茂地ぬ前 〈縮緬帯とうハンカチや 鶴小が情ヨー ンゾヨー〉

ワネ カンドウナートウサヨー ンゾヨー 〈ワネ スンドウナートウサヨー ンゾヨー〉

六角堂(…識名園が有名だが屋部にもあった)の裏に咲く牡丹花は、〈花と花と咲けば御縁と思って。〉

ゲンロー帽子(…戦前、大正時代から作られた紙縫製の沖縄パナマ帽)は(那覇の)若狭町、

駒下駄は(那覇の)久茂地の前、〈縮緬帯とハンカチはチルー(女の名)ちゃんの愛情。〉

私ヤ(意不詳)、ヨー 彼女ヨー 〈私ヤ(意不詳)、ヨー 彼女ヨー〉

## 27. 《海ぬちん法螺》

酒ヤボンボン 茶碗シ飲ミ飲ミ 〈サー マカイシ飲ミ飲ミ 浮世又真ン中〉

海ぬちん法螺が 下草ゆ跳ん登てい 唐ん見ゆんどー 大和ん見ゆんどー

〈沖繩かいどー 浮世又真ン中 サー 沖繩かいどー 浮世又真ン中〉

東さんさぎぬ さらさらとう吹きば 明日や真南なてい 船ぬ入ゆんどー

〈酒ヤボンボン 茶碗シ飲ミ飲ミ サー マカイシ飲ミ飲ミ 浮世又真ン中〉

海の疣海蝨(…細く尖った小さな巻き貝)が下草を跳び登って、中国も見えるぞー、日本も見えるぞー。

〈沖繩によー、浮世ノ真中。サー、沖繩によー、浮世ノ真中〉

東さんさげ(意不詳)がさらさらと(すがすがしく)吹くので、明日は南風になって船が入るよ。

〈酒ハタツブンタツブン、茶碗デ飲メ飲メ、サー 御飯茶碗デ飲メ飲メ。浮世ノ真中〉

## 28. 《スラサ エースラヨー》

スラサ エースラヨー 〈ヤリクヌ シースラヨー〉

あたびちやぬ腿肉ヨンサー あたびちやぬ腿肉ヨー 炒りち井小に 中前に居しとてい 芳しや旨さぬヨー

〈スラサ エースラヨー ヤリクヌ シースラヨー〉

あちやー ゆー にーびち あちやー ゆー にーびち まくら か とー はなしう むっ  
明日ぬ夜ぬ根引にヨンセー 明日ぬ夜ぬ根引にヨー 枕掛きとてい 話面白さぬヨー

〈スラサ エースラヨー ヤリクヌ シースラヨー〉

蛙の股肉を、蛙の(股肉を炒め井に(して)、二番座に置いていて、いい匂いでおいしそう。)

明日の夜の結婚に、明日の夜の(結婚に、枕で横になりながら話すのが面白い。)<意不詳>

29.《ハラ ドンドンセー (十七八節)》 ……一般には《ドンドン節》《十七八節》として知られる曲

ハラ ドンドンセー (島ウチサンセー 踊ティ遊バナ)

じゆしちはちぐる ゆ まんぐい ま ゆー く たばー わーじ ゆー  
十七八頃や 夕間暮どう待ちゆるヨー (夜ん暮りてい給り 吾自由しゃびら)

ハラ ドンドンセー 島内サンセー 踊ティ遊バナ

さとう さ かたな さやふた うとう た い む くとう  
里が挿す刀 鞘二ちあゆみヨー (夫人二人持ちゆる 事やねさみ)

ハラ ドンドンセー 約束ンゾヤ 来ンドウアガヤー

(数え年)十七八の頃は、夕暮れこそが待ち遠しい。(夜も暮れておくれ、私は自由になります。)

ハラ ドンドンセー ムラ内デハシナイサ。 踊ッテ遊ビタイ。)

彼が差す刀(に)鞘(は)ふたつあるか。(夫も二人持つことはないのだ。)

ハラ ドンドンセー 約束シタ彼女ハ来ナイノダロウカ。)

## 本調子

### 30.《唐船どーい》

サー 唐船どーいさんてーまん 一散走えーならんしや (ハラ ユーヒガネー)

わか さ まちむら とーしん し な ふあ めー カリユシ カリユシ  
若狭町村ぬサ 瀬名波めたん前 (ハイヤ センヨー シトゥリトウナ 嘉例吉 嘉例吉)

サー 音に響まりる 大村御殿ぬ梅檀木 (ハラ ユーヒガネー)

な は とうゆ く む ち ほー ぎー カリユシ カリユシ  
那覇に響まりるサ 久茂地ぬ這いがぢまる木 (ハイヤ センヨー シトゥリトウナ 嘉例吉 嘉例吉)

サー 中国船だぞー、と言っても一目散に(港に)走らないのは、(那覇)若狭町の瀬名波(屋号)のお爺。

サー 評判の高い(首里の)大村御殿の梅檀の木、那覇に名高い久茂地の這い拡がったガジュマルの木。

(ハイヤ センヨー シトリトナ 嘉例吉 嘉例吉)

## ▼途絶曲《ましゅんく節》

…歌詞内の( )は下句を歌った場合の想定歌詞

ヨーテー まじんくとうなびとうヨーテー まじんくとうなびやヨ 見比びていみりば ウネ スクテントウンテン

ヨーテー まじんくや惜しさヨーテー まじんくや惜しさヨ なびや清ら{清ら}さ ウネ スクテントウンテン

ヨーテー 挿垣ぬ上にヨーテー 挿垣ぬ上にヨ なべら花咲かち ウネ スクテントウンテン

(ヨーテー うりが実成らばヨーテー 里に挽ていうえさなや[挽やいうしやぎらな]) ウネ スクテン~)

ヨーテー 真謝原ぬ芋やヨーテー 真謝原ぬ芋やヨ 一本から三ぴらぎ[ばき] ウネ スクテントウンテン

(ヨーテー 赤嶺ぬくむいヨーテー 赤嶺ぬくむいヨ 洗い{洗い}所 ウネ スクテントウンテン)

ヨーテー マシュンクとナビー(共に伊江島の女の名)とヨーテー マシュンクとナビーとをヨ

見比べてみれば、ホラ スクテントウンテン/マシュンクは惜しい。ナビーは美しい。(僅かにナビーが上)

竹挿しの垣根の上にヘチマの花を咲かせて、(その実が成ったらあの方にもいであげよう[あげたい]。)

真謝の畑の薩摩芋は、一本から三杯(も穫れる)。(赤嶺の池(が芋の)洗い場。)